

新しい授業づくりの文化をつくる 「吹田の授業づくり Update プラン」 校内研究活性化プラン

令和7年10月3日実施 Update プラン通信 第10号 小国 授業研究会

小国授業研究会 10月3日(金) 単元名:くらしの中の和と洋

「吹田の授業づくり Update プラン」校内研究活性化プランでは、教材研究会と授業研究会を1セットとして実施しています。今回は小学校国語科の授業研究会を実施しました。授業者より、教材文を読んだことから和と洋の比較を行い、子ども自身が相手意識・目的意識を持って報告内容を書いていくというご提案をいただきました。齊藤先生より、単元で言語活動を描く時のポイントとして、子どもたちが目的意識を持てるように「何のために読むのか」を問い直し、「読む」と「書く」を往還させて学びを描くことについて改めてお示しいただきました。そして、子どもたちの経験をベースにした“材”の選択の大切さをご指導いただきました。

—講座の目的—

- ①未知の問題場面に会っても、解決に向けて行動できる汎用的な力(資質・能力)を子供たちに育むため、学習指導要領に基づいた授業づくりについて実践を通して主体的に学ぶ。
- ②教師同士のネットワークを構築し、講座での学びを吹田市内で広げるとともに、自校でのOJTに生かすことにより、学習指導要領に基づいた授業づくりの文化を築く。

—講座の目標—

吹田市の全小中学校が学習指導要領に基づいた授業づくりに取り組む。

授業者の実践から学ぶ 授業づくりのポイント

読むことと書くことの役割と価値について

→「書く」ために「読む」＝読むことの目的・必然性を子どもたちが持つ（読むと書くの往還）

言語活動を自走させる

→有能な学び手としての子どもを信じること(授業づくりの根幹)から始まり、「教える」から「学び支える」ことが伴走者としての教師の役割

授業者の提案

Why なぜ学ぶのか

子供達が身につけるべき資質・能力は？

【知識及び技能】

- ・漢字と仮名を用いた表記、送り仮名の付け方、改行の仕方を理解して文や文章の中で使うとともに、句読点を適切に打つこと。
- ・比較や分類の仕方、必要な語句などの書き留め方、引用の仕方や出典の示し方、辞書や事典の使い方を理解し使うこと。

【思考力・判断力・表現力】

- ・相手や目的を意識して、経験したことや想像したことなどから書くことを選び、集めた材料を比較したり分類したりして、伝えたいことを明確にすること。
- ・書こうとしたことが明確になっているかなど、文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付けること。
- ・段落相互の関係に着目しながら、考えとそれを支える理由や事例との関係などについて、叙述を基に捉えること。
- ・目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約すること。

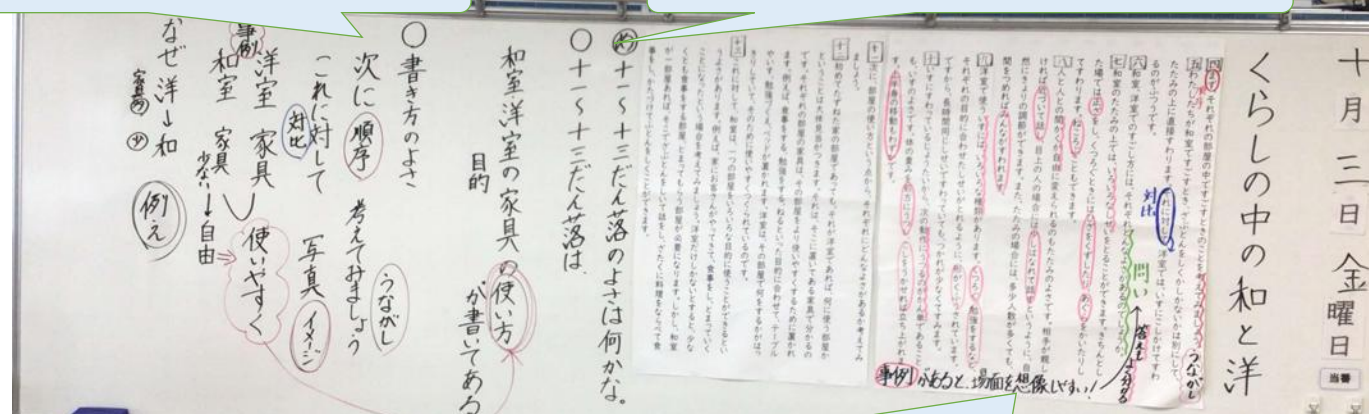
【学びに向かう力、人間性等】

- ・言葉がもつよさを感じるとともに、進んで目的に合わせて材料を整理し、学習の見通しを持って、報告書を作ろうとする態度を養う。
- ・言葉がもつよさを感じるとともに、進んで観点を立てて、比較することについて理解し、学習課題に沿って、複雑な情報をわかりやすくしようとする態度を養う。

自分たちが「書く」際に生かせそうなことについて確認する。

【単元終了時の目指す子供の具体的な姿】

- ・段落相互の関係を叙述をもとに捉える姿
- ・集めた材料を目的に応じて整理し、相手に伝わる文章で表現する姿
- ・進んで材料を集め、比較や分類を通して整理し、学習したことを活かして、自分の力に合った報告する文章を作る姿



段落の相互の関係についての理解を深める。

事例のよさについて吟味する。

What 何を学ぶのか

子供達の学習対象は？

【本単元で学ぶ見方・考え方】

- ・考えと理由や事例との関係について言葉の意味、働き、使い方に着目して捉えたり、問い直したりして、言葉への自覚を高める。

【本単元で学ぶ学習過程】

《読むこと》

構造と内容の把握

精査・解釈

考えの形成

共有

《書くこと》

題材設定・情報収集・内容の検討

構成の検討

考えの形成・記述

推敲

共有

How どのように学ぶのか

子供達の学習過程は？

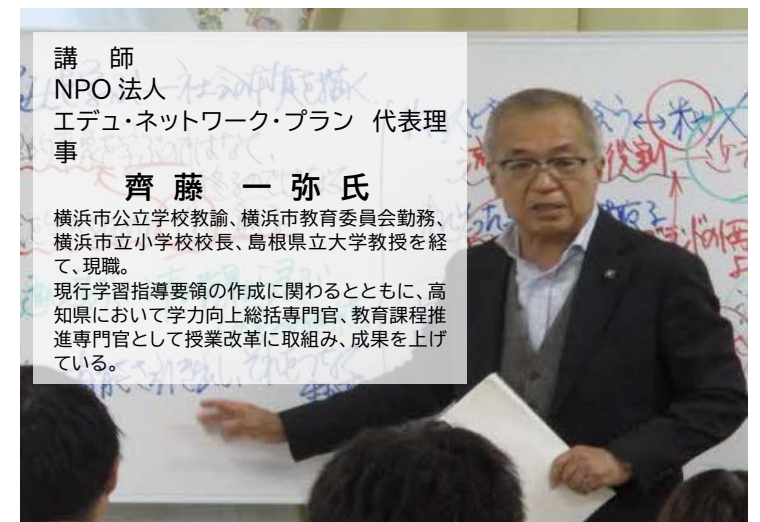
「和」と「洋」の比較を行い、共通点や相違点を捉えるとともに、教材文から学んだことを活かして報告書を作成していく。

時 総合 (1・2・3)	学習過程	学習活動	見方・考え方
1・2・3	題材の設定/内容の検討/構造と内容の把握	学習課題・計画	伝わりやすい書き方は？
4・5	精査・解釈/構成の検討/考えの形成・記述	序論を捉え、書く	話題提示の言葉の意味・働き・使い方に着目して捉えたり、問い直したりする姿
6・7・8 9・10・11	構造と内容の把握/精査・解釈/構成の検討/考えの形成・記述	本論を捉え、書く	考え方と事例の関係について言葉の意味・働き・使い方に着目して捉えたり、問い直したりする姿
12・13	精査・解釈/構成の検討/考えの形成・記述	結論を捉え、書く	呼びかけやまとめを表す言葉の意味・働き・使い方に着目して捉えたり、問い直したりする姿
総合(4)			
14	推敲	推敲する	相手や目的に応じて、どのような言葉を選び表現するのが適切かを捉え、問い直す姿
15・16	共有	発表会/振り返り	相手や目的に応じて、どのような言葉を選び表現するのが適切かを捉え、問い直す姿

講師
NPO法人
エデュ・ネットワーク・プラン 代表理事

齊藤 一弥氏

横浜市立学校教諭、横浜市教育委員会勤務、横浜市立小学校校長、島根県立大学教授を経て、現職。
現行学習指導要領の作成に関わるとともに、高知県において学力向上総括専門官、教育課程推進専門官として授業改革に取組み、成果を上げている。



齊藤先生より

国語科の目標 言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

Why

なぜ学ぶのか

子供達が身につけるべき資質・能力は？

What

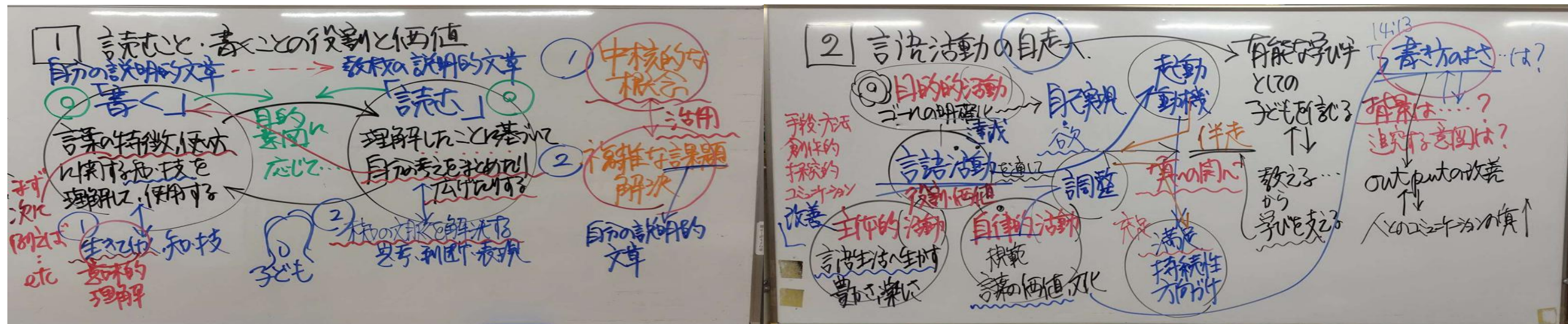
何を学ぶのか

子供達の学習対象は？

How

どのように
学ぶのか

子供達の学習過程は？



1 読むこと・書くことの役割と価値

「書く」という目的が先にあることが大前提

「自分の説明的文章を書く」



“何を書くのか”

「教材として用意されている説明的文章を読む」

…子どもたちの中に教材で用意された説明的文章に近づきたいという想いが生まれる。

目的や意図に応じて書く、応じて読むという
仕事が大事

目的や意図に応じて読む。

→理解したことに基づいて自分の考えをまとめたり、さらには深めたり、広げたりする。
つまり、書くという仕事をより充実させるために自分の考えをまとめているということ

言葉の特徴や使い方に関する知識や技能を理解し、それらを使用する。

つまり「書く」と「読む」の関係を考えるのであれば…本時で書く時間が必要！！

言葉の特徴や使い方に関する知識を理解したのであれば、最後の5分10分で「今日学んだことを使うとみんなの文章はどうなるのかな？」と問う
(オーセンティックな学びの入り口)

「もしも前時も同じようなことをしていたとしたら、読むと同時に机の隣に自分の書いてあるものが置かれてしかるべき。」

①書く：生きて働く知識・技能 → 自分が文章を書く、作るというプロセスの中で、言葉の特徴や使い方を学んでいる(意味的理解)

「書く」という仕事は、知識・技能を磨いている。

「読む」という仕事は、思考・判断・表現を磨いている。

②読む：未知の文脈を解決する思考・判断・表現

→読むことによって自分のこれまで作ったこともない文章をより質の高いものにしていくとする。

①中核的概念 ②複雑な課題解決

①をうまく活用して、②を図っていくことを目指していきたい。

2 言語活動の自走

○そもそも言語活動とは？

言語活動＝ゴールが決まっている！つまり、目的的活動と言われる。
→その目的の遂行達成を目指す。

○では、子どもにとっての言語活動とは？

言語活動＝①自己実現(なりたい自分があるかどうか)⇒「欲」があるかどうか
⇒本単元の「和」と「洋」の違いや、あの説明文に負けないくらいの説明文を書きたい！

言語活動＝言語生活をより豊かにする！つまり、②主体的活動(自己の改善)

⇒子どもがハンドルを持つということが大事。自分の言語力というものをより豊かにしていく。豊かさや楽しさを感じられるように改善していく。

言語活動＝誰にでも正しく伝わるような表現にしよう！つまり、③自律的活動(自己調整)

⇒自分のしていることが本当にそれで大丈夫なのか立ち止まって考える。
常に自己調整しながら学び進めていくということが大事になる。

全てに「自己」がつく。自己実現・自己改善・自己調整
言語活動はそういった意味合いを持つ活動のことを指す

○自走に必要な要素とは？

自走＝目的的活動としてのゴールに向けてしっかりと起動させる。言い換えるならば、動機をはっきりと持たせるということが大切。

そして、言語活動を通して、自分たちの学びが一步改善して、満足感を得る。こうした経験を子どもたちが経験することで、次も取り組んでいこうと思える。

☆そのために必要なことは、自分の書いたものをちょっと調整してみるということ。言い換えるならば、友だちに読んでもらうことで前の時間に比べるとまた一步進んだと実感する。

⇒調整というものが入って常に質を高めていく。こうした先生と子ども、子どもと子どものやりとりを大事にしていく。

この一連のプロセスを「伴走」という。

3 有能な学び手としての子どもを信じる

○授業づくりを進めるにあたっての根幹とは？

・子どもを信じる＝学びの主体・主語を子ども委ねていくこと

有能な学び手としての子どもの能力そのものを信じる。

この部分がなかなかできない部分でもある。

○このスタートを大事にして、授業づくりを進めていくことが大事

教えるということから、学びを支えるということ

へと視点

を変えていく。

学びを支えるということは何も教えないということではない。

⇒もちろん子どもたちは、教えるべきことは教えないとわからない。何も言わなくても子どもがふっと1～10まで思いつくはずはない。それぞれの教科の持っている価値や内容はたくさんある。

教えすぎてもいいのか？

言語活動を「通して」という風に言われているか？それはその主語が子どもであるから。だからこそ、なぜ子どもたちが書き方の良さをその営みの中で追求していくのかその意図を明確にしていけることが大事。

意図：アウトプットの質的向上
＝人とのコミュニケーションの質的向上

受講者の感想

- 目的的活動を推進するための活動について、新たな切り口を学ぶことができた。子どもの欲をかき立てる方法を探りたい。
- 何のために読むのか、誰のために書くのかという動機を教師も子どもも持って授業に臨むことが大切だと思いました。
- 子どもを信じて子どもに学びをゆだねる大切さについて改めて感じた。